



バカのひとつは 人マネです……

作り続けて半世紀——そのオーソリテイ

高城重躬氏

仙人、なのである。

—— キャンデイズはお好きですか？

「そんなの知りません」

—— それでは、太田裕美はご存知ですか？

「さあ、存じませんね」

—— あのう……長島茂雄は？

「ナガシマ？……昔、耳にしたような……」

大変まじめに答えていただいた。

おかしい、というよりは、肅然とした思いにとらわれ

る。これが「斯界の権威」というものが持つ味なのだ

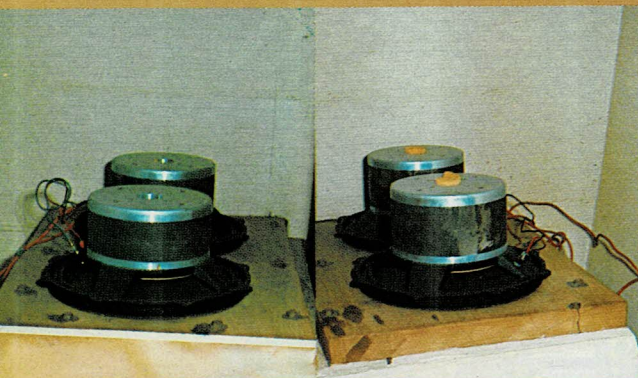
ろう。知らなかった。

高城重躬氏、六十四歳。「原音再生」を求めて半世紀

音を食らって生きてきた「仙人」がここにいます。



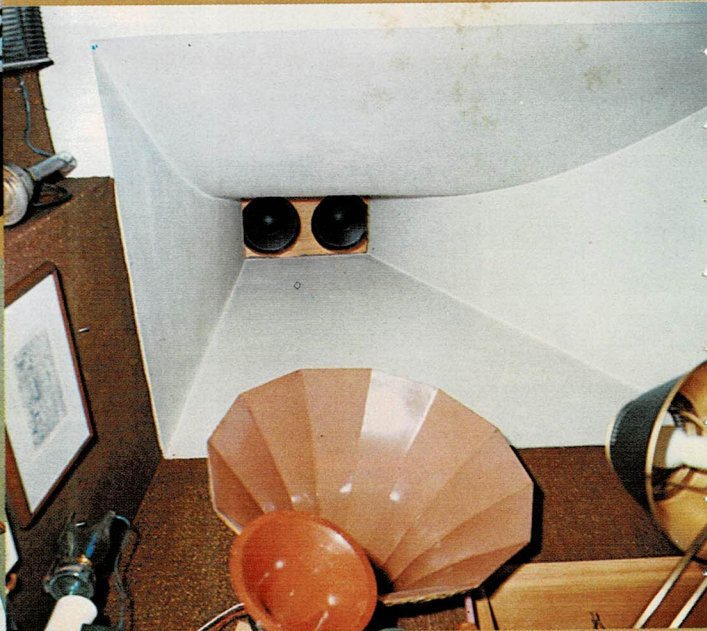
ガス灯に点火「バロック音楽を聴く時にいいですよ」



後藤精弥氏特製の低音用ホーンのドライバー 片チャンネルに38cmウーファーが2個 特に右チャンネルは1個40kgもありパッフルに乗せたらネジ止め不要 値をつければ1000万円以上//

〈エピソード〉

隣家が火事になった。逃げまどう家人をよそに、ふりしきる火の粉の中を録音機を持って立っていた。後で再生していたら、消防自動車がとんで来た。



氏の4ウェイ・オールホーン・スピーカー・システム カットオフは225Hz 1000Hz 7000Hz 低音用ホーンのドライバーは真下ではなく 部屋の中央を向いている

ものを持つべし。三、故にメーカー品よりいいものではダメ

オモチャみたいな市販品だけ知っているようにはダメ

数学まで知っていなければいけないように

素養を持つ 二、算数を教える時には高等

一、音楽大学の入試に通るだけの音楽的

氏の語る評論家心得とは：

「ま、人は好き好きですけれど」とは言っても、出てくる言葉はシビアである。

「オーディオでめしを食っちゃダメです。他に取柄のないバカなら別ですけれど」

「まともに噛み締めると歯が欠けてしまいうような言葉をいただいた。これでは大恩あるオーディオ評論家の諸先生方は、総バカになってしまおうではないか。」

「ま、人は好き好きですけれど」とは言っても、出てくる言葉はシビアである。

「オーディオでめしを食っちゃダメです。他に取柄のないバカなら別ですけれど」

「まともに噛み締めると歯が欠けてしまいうような言葉をいただいた。これでは大恩あるオーディオ評論家の諸先生方は、総バカになってしまおうではないか。」

「ま、人は好き好きですけれど」とは言っても、出てくる言葉はシビアである。

〈評論家心得〉



戦後間もなくイギリスから、当時世界一と言われていたパートリッジのトランスを輸入して作った。それから、字で書けば四百字詰め原稿用紙で約千枚分ほどいろいろ努力を重ね、最後に6AS7の真空管を、林のように並べたOTLをこしらえた。この音は良かったそうだ。そしてトランジス

「真のハイファイは、ここで演奏し、ここで録音し、ここで再生して、それがもとの音と同じにきこえるべきだ」(音の遍歴)

物のない時代を経験してきた氏の自作歴は長い。エナメル線、抵抗、バリコン、蓄電池などからターンテーブル、そしてコンタリット・ホーンに至るまで、氏のオーディオの歴史は即自作の歴史なのである。

「真のハイファイは、ここで演奏し、ここで録音し、ここで再生して、それがもとの音と同じにきこえるべきだ」(音の遍歴)

物のない時代を経験してきた氏の自作歴は長い。エナメル線、抵抗、バリコン、蓄電池などからターンテーブル、そしてコンタリット・ホーンに至るまで、氏のオーディオの歴史は即自作の歴史なのである。

〈メモ〉

明治四十五年生まれ。両親は共に音楽家。東京高等師範学校(数学)卒。在学中東京音楽学校に入学、ピアノ・作曲を学ぶ。都立三田高校教諭、都立深沢高校校長などを歴任。昭和四十七年定年退職。著書に「音の遍歴」(共同通信社刊)他。





中央が自慢の糸ドライブ式超重量級ターンテーブル プレイヤー右側のコントロール・アンプは自作
左の中ほどにドライブ用のテレフンケン77極モーターがある

タの出現。シリコンの5W程のものを中音用に試作し、長い間真空管と比べた後、トランジスタでマルチ化したのが、低音にはしばらく管のOTLを使っていた。

「私はね、パーツを替える時には短くて一ヶ月、長くて半年は比較するんですよ。やっぱり何ヶ月か実験した上でないと。オーディオってというのはせつ。かちが一番ダメ」
〈例えばプレイヤー〉

ユニークな糸回し方式のターンテーブル。考えついたのは昭和二十六年ごろである。当時良しとされていた舶来品をすべて試したうえで（結局みんな気に入らなかった）の自作である。今でこそ思いもよらないが、そのころはサイクルが途中で50から48、47位に変わるノことがあった。で、使ったのが自由にスピードの変わるSP用のモーター。露店で売っていたNHKの放出品である。それに溝車をつけて回したのがもとになっている。

振動を避けるためにモーターは遠く離し、重いターンテーブルを木綿糸で回す方式は現在も同じ。毎日回しっぱなしで、メイテナンスは年に一度軸受けのボールを取り替えるだけ。ちなみにこのボール、ひとつ五円である。

「自分に対しては納得するまでやりますけど、他人さまには別に。その人が満足すればいいんです。これをマネすることはありません。オーディオでのバカのひとつは人マネです」

〈例えば低音用コンクリート・ホーン〉

「あの人が嫁いで三十年。欺されることの連続でした。あの人、大工さんに口止めして、気がついたらできてました。エコー・ルームだって最初は物置のはずだったんですよ」（奥さま）

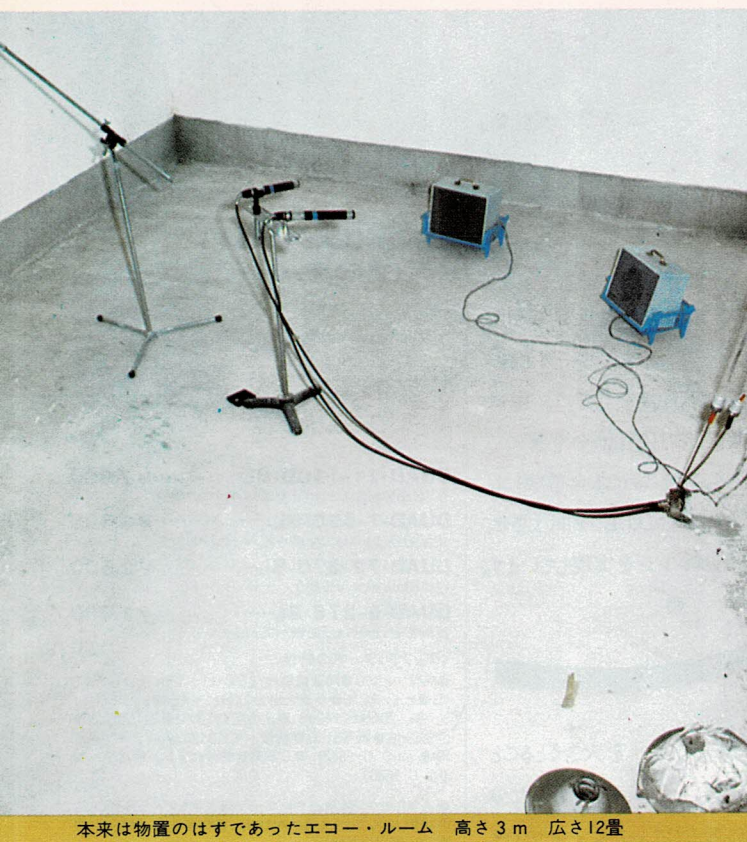
再生音の半分以上はスピーカーで決まると言うだけあって、氏の努力の大部分はスピーカーに注がれている。ジムラン、タンノイなどは聴くには聴いたが、音にへんな色づけがあつて落第。バスレフ、バックロードと種々作るはめになったが、結局ホーン型に落ち着いた。原理的に言えばホーンが一番であるという。コーン型が本来名人芸、カンであるのに対し、ホーンには数式がある、と数学の先生らしい説明であった。「ホーンをだめって言う人もいますけど、それは悪いけど使いこなせないからですよ」と言っても、氏とて楽に使いこなしたわけではない。例えば低音用ホーンは、木で作って曲げたが不合格、天井裏をわけて直角に曲げてみても、音が出ずにタメ息だけ出て失敗と、四苦八苦であった。現在の低音用コンクリート・ホーンは、家を建て直す時にこしらえた。五年前のことである。

「金はあまりかかっていませんよ。これコンクリート・ホーン」だって、家の建築費とコミですからね。安いもんですよ」
〈オーディオは銭か？〉

氏のリスニング・ルームは約三十八平方メートル。天井の素材はパラトーン、壁に



中低音用・朝顔型ホーンのドライバー部



本来は物置のほずであったエコー・ルーム 高さ3m 広さ12畳

は約二トンの鉛が遮音用に、ドアには防音用に砂が使われている。建物全体の建築費は、五年前で約千六百万円。

「ホーンのカンプで苦労しました。あとは、高城先生に生活が伴わない音響室はいけないと言われて、少し頭を使いましたけれど、今作れば三〜四千万はするんじゃないですか、あの家は？」設計、建築に携わった水上さん。高いか安いかは読者の判断に任せよう。ただ、リスニング・ルームそれ自体には、目ん玉がとび出る程の金はかかっていないと言う。それにしてもウラヤマシイ。「あのね、家に来る高校生が私の装置をう

らやましがるんですよ。そういう時は言うんです。君、ボクの年までにあと何年あるの？ 四十年、それだけあれば何でもできるよ、と」。

なる程、では四十とか五十の声を聞いた人は如何に？

「この世のものとは思えない音を出すのならば、例えはP-610を使っても、タンノイなんかより素直でいい音を出すこともできるんですよ」。

意思あれば道あり、なのである。